

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	THE MOON AND SIXPENCEにおける読み易い文章 〈卒業論文要旨〉
Auther(s)	藤井, 郁子
Citation	広大言語 , 10 : 34 - 36
Issue Date	1970-12-15
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046348
Right	
Relation	



THE MOON AND SIXPENCE

における読み易い文章

藤 井 郁 子

I 序 論

わかりやすい文章とはいかなる文章であるかということについて、サマセット・モームの「THE MOON AND SIXPENCE」の文章から考察してみた。

II 本 論

第一章 方 法 論

モームが、作品「THE SUMMING UP」の中で挙げた三つの要素、文の明快さ、簡潔さ、音調のよさのうちの、文の簡潔さについて、更に、自分の考えうる要素をとり出し考察してみた。

第二章

容易な単語を使用すること、文の長さは短いこと、文の種類は複文よりも単文を多く使用することという三つの要素は、文章を理解し易いものにする為には是非必要であると思われる。そこで、ディッケンズの「THE PICKWICK PAPERS」を対象にして調べた結果「THE MOON AND SIXPENCE」の方が、理解し易い文章である為の要素を多く持っていることがわかった。

第三章 抽象名詞の主語の使用

The explanation came a week later.

(XXVIII P. 114)

このように抽象名詞を主語にした表現は、非常に簡潔で分り易い。このような表現を、「THE MOON AND SIXPENCE」の中に多く見い出すことができた。

第四章 分詞構文の使用

論理の明確さを基しく犠牲にしない限り、不変化詞なしの *ing-form* は叙述を写實的にし、生動感を与える。「THE MOON AND SIXPENCE」の中には、このような分詞構文の使用によって、関係代名詞、その他の節の重複を避け、文章がスッキリしている例が多い。

第五章 名詞的表現

文を簡潔するのに役立つと考えられる名詞相当表現として、代名詞・形容詞・不定詞・分詞・動名詞・句・節が挙げられるが、ここでは動名詞について考察する。「THE MOON AND SIX-PENCE」には、動名詞を用いた文が多い。このような表現は、文の簡潔には役立つが、意味あいから言えば味けないように思う。動名詞は、不定詞が静的であるのに比べて、動的であるから、文に活気が出て、現実感が増してくるように思われる。

第六章 名詞構文

この作品を読んでいて、動詞を用いて説明する代りに、名詞もしくは前置詞＋名詞を用いた例に数多く出会った。この表現は文を簡潔にするばかりでなく、英語特有の表現でもあるから英語らしい生き生きした文章になる。

III 結 論

第二章において述べている単語の難易度、文の長さ、文の種類については、第三章以下の要素にくらべて断定しうるのではないだろうか。第三章以下の要素については、いずれも使用しているからといって、文が簡潔であるとは断定できない。ただ、そういう傾向が強いということは言い得る。また最後の二章で扱った要素は、その効果は小さいが、部分的にしる、文を引きしめる働きをする。

参 考 文 献

・ 文章心理学

波多野 完治

大日本図書出版

・ 文体論入門

日本文体論協会編

三省堂発行

・ 文章心理学の問題

波多野 完治

大日本図書出版

・ 作家の手帳

サマセット・モーム

新潮社出版

・ 分詞・動名詞（英文法シリーズ）

乾 亮一

研究社出版

・ 言語研究＜問題編＞

小林 英夫

三省堂出版

。 AN ADVANCED ENGLISH SYNTAX

NOSOF

篠崎書林発行

。 THE SUMMING UP

W. S. Maugham

a Penguin Book 発行

(文責 豊島洋子)

横光利一の文体について

水 野 真

序 横光利一は新感覚派から心理主義へと移行している。そこで、新感覚派の作品と心理主義小説を比較検討してみる事により、横光利一の文体が、この間にいかなる相異を示し出したのか、つまり、手法の変化を明らかにしていこうとするのが、この論文の目ざすところである。作品として、新感覚派時代の代表作の「日輪」と心理主義小説の代表として「機械」を更に、作品における時間的な変遷をも探るために、「日輪」につぐ新感覚派の作品である「静かなる羅列」と「上海」「機械」と同系統の「時間」、後期の作である「寝園」「紋章」と計七編を取り上げ、変化の著しいであろうと予測される文の長さ、品詞の用法、文の構成の3つに分けて調べてみることにした。

本論 (I) 文の長さ

- (a) 方法—ここでは「日輪」「静かなる羅列」「上海」「機械」「時間」「寝園」「紋章」の七つの作品を対象として調べていく。(1)各作品の会話体を除く四百句からなる地の文を取り出す、(2)取り出した文章における点間字数、文を構成する字数及び句数を調べる、(3)次に平均字数、文長中数、文長指数、標準偏差、変化係数を求める。
- (b) 文長—統計的な数値でそれらがわかりやすい表とグラフで示されている。
- (c) 句長—文の構成単位である句の長さは、文長といかなる関係を持っているであろうか、ということをおべている。

(II) 品 詞

ここでは「日輪」「静かなる羅列」「上海①」「上海②」「機械」「時間」「紋章」の七編と、比較資料として川端康成の「千羽鶴」谷崎潤一郎の「細雪」の計九編を対象にしている。そして